

桜

桜は、日本国民に最も愛好され、国の象徴とされる国花の一つとされています。

多くの国家機関や学校、民間会社、さらにはスポーツ団体などの紋章に使用されたり、今の時期になりますと、店頭には桜をイメージした菓子類など様々な商品が並びます。百円硬貨の表には、桜がデザインされています。

桜の名称の由来は定かではなく、富士山頂から、種を蒔いて花を咲かせたとされる「コノハナサクヤヒメ」の「サクヤ」ととって「サクラ」となったという説、また「咲く」に複数を意味する「ラ」を加えたものとされ、元来は花の密生する植物全体を示したという説があります。一方興味深いのは、春になると里におりてくる「稲（サ）」の神が依りつく「座（クラ）」であるので「サクラ」であるとも言われます。

奈良時代以前、桜は観賞用ではなく、花の咲き具合でその年の稲やその他の農作物の収穫を占う花でした。また、その開花によって種蒔きなどの時期を教える曆にもなっていました。「花といえ桜」というような代表的な花になったのは平安時代からで、実際に奈良時代に編まれた『万葉集』では梅の和歌が百十八首に対し、桜は四十四首であり梅の歌が多かったです。平安時代前期の『古今和歌集』には梅の歌が十八首に対して、桜は七十首と、桜は梅を逆転して春を詠む花の主役になり、数多くの和歌に詠れることになりました。左の和歌にそれが象徴的に詠まれています。

世の中に たえて桜のなかりせば 春の心は のどけからまし 在原業平

現在、日本の桜の八割は染井吉野であると言われています。葉に先駆けて一斉に開花するその華やかさは、私達を魅了してやみません。染井吉野は、江戸時代末期から明治時代、東京染井村（現在の東京都豊島区付近）の植木職人が大島桜と江戸彼岸を交配し「吉野桜」と名付けて売り出したのが初めてです。この名前は、桜の名所で有名な奈良の吉野山に因んで付けられたのですが、これでは奈良の吉野山の桜であると誤解を招くとのことで、明治三十三年に染井吉野という名前に再度命名されたのです。尚、奈良の吉野山の桜の殆どが、花と葉が同時に開く山桜です。

三月初旬頃より気象庁から発表されます「桜の開花予想」は桜の中でも染井吉野が基準となっています。この発表は当初、昭和二十六年に関東地方を対象に行われていました。その後、昭和三十年より全国を対象に行われるようになりました。気象庁は、毎年三月の第一水曜日に第一回の「さくらの開花予想」を発表します。その後、水曜日毎に適宜修正しながら、四月下旬まで数回の発表を行います。気象庁が示す「開花」とは、花が五く六輪開いた状態をいい、満開は八割以上が咲いた状態を言います。

桜の話題を取り上げれば切りがありませんが、結納や結婚式などの御祝いの席では、「花開く」と縁起がよいものとして、桜茶でもてなす習慣があります。また、おめでたいことを「桜咲く」とも言います。

人々の心を和ませる、桜の開花が待ち遠しいものです。

※山中で自然交配で出来た桜を東京に持ち帰ったものか、それとも植木職人による人工交配で生まれたのか、議論が分かれています。

【参考資料】

『和歌植物表現辞典』 東京堂出版

気象庁HP <http://www.jma.go.jp/jma/index.html>